廿日市市の文芸碑拓本

山隅（やまずみ）　衛（まもる）歌碑　（桂公園内）

表	裏
ふるさとの町のいらかを 見にのぼる城あとの山 春蝉のなく　衛	皇紀二千六百年 十一月二十三日 晩鐘社同行建之 晩鐘誌創刊貳拾周年記念

山隅は明治二十七年廿日市町中東に生まれ、小学校教諭の傍ら大正十年（1921）文芸誌「晩鐘」創刊。一時休刊をしながらも80年を経た平成十三年（2001）廃刊となった。鈴峰学園の教壇に倒れ、のち牛田で昭和三十五年六十五歳で永眠。　この碑は桜尾本町桂公園にある。

皇紀とは、明治政府が定めた日本独自の紀元（きげん）で、1872（明治5）年に明治政府が、神武(じんむ)天皇が即位した年を、記紀（古事記と日本書紀）の記載から西暦紀元前660年と決め、その年を皇紀元年とし、皇紀二千六百年は昭和十五年（1940）にあたる。

佐方川の石に短歌会「晩鐘」主宰山隅自筆の書を同会員の平氏が彫刻。廿日市を離れ十年後の歌には故郷への想いを、春蝉の二字に人生観を込めて人の心を打つ。

故郷への想いと云うなら、現桜尾本町辺りにあった石州津和野藩船屋敷に生まれ、江戸幕府天文生となり、東蝦夷地海路測量で直通航路を初めて開拓した堀田仁助寄進の佐方八幡神社石灯籠に刻まれた天文生にも同じ想いが込められている。

尚、山隅の歌碑はほかに広島市西区三滝寺に二ヶ所ある。